24　次の文章をよく読んで、後の設問に答えよ。

〈大阪市立大〉　二〇一六年度出題

（注一） （注二） 　、皆 ①令㆓ 論㆒㆑ 己。 ㆓ ㆒、 ㆓ ㆒、 ㆓ 君 之 ㆒ 也。㆓ 於 ㆒。任 座 、 不 君 也。㆓（注四） 　㆒㆔ ㆓ 君 之 ㆒、而 ㆓ 君 之 ㆒。 ㆓ 君 之 不 ㆒ 。文 侯 不㆑ 。 ㆓ 於 顔 ㆒。任 座 而 。 ㆓

㆒。翟 黄 、 賢 君 也。臣 、 主 、 臣 之 言 。 任 座 之 。② ㆓ 君 之 ㆒ 。文 侯 、㆑ 。翟 黄 、③ 不 。臣 、忠 ㆓ ㆒、而 ㆔ ㆓ ㆒。④座 ㆓ 於 ㆒。翟 黄 ㆑ 、任 座 ㆓於 ㆒。㆓ ㆒ ㆑ 。任 座 、⑤文 侯 ㆑ 而 ㆑ 。 ㆓ ㆒。文 ㆓ 翟 黄㆒、 ㆓忠 ㆒ 矣。

（『呂氏春秋』より）

〔注〕（一）――中国、戦国時代の魏の君主。

（二）――酒宴を催すこと。

（三）――中国における官位の一つ。後出の「」や「」という人物も大夫の一人。

（四）――戦国時代の国名。

問１　傍線部①を書き下し文にせよ。

問２　傍線部②について、どのような理由で翟黄は「二君之一」と言ったのか、わかりやすく説明せよ。

問３　傍線部③を、「不可」の具体的な内容を補って現代語訳せよ。

問４　傍線部④について、翟黄はなぜこのように推測したのか、わかりやすく説明せよ。

◎問５　傍線部⑤について、文侯はなぜこのような行動を取ったのか、本文全体の内容を踏まえてわかりやすく説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　諸大夫をして己を論ぜしむ

問２　Ａ任座が文侯を不肖の君と直言したが、Ｂ臣下が直言するのは君主が賢君である証拠だから。

Ａ＝５〔「任座が文侯を愚かな王と言った」という意が書けていれ

ばよい。〕

Ｂ＝５〔「家臣が王にはっきりと意見できるのは王が優れているか

らだ」という意が書けていればよい。〕

問３　Ａ任座を、Ｂどうして呼び戻せないことがありましょうか。いや、呼び戻すことができます。

Ａ＝２

Ｂ＝８〔Ｂのないものは全体０。「いや、…できます。」がないも

のは０。〕

問４　Ａ忠臣は忠節を尽くして自分の死を恐れないと聞いているので、Ｂ任座が罰を恐れてＣ逃げ去ってしまうことはないと考えたから。

Ａ＝３〔Ｃの理由として書かれていることが必要。〕

Ｂ＝３〔「罰」は「処刑」などでも可。「任座が」がないものは減

点２。〕

Ｃ＝４〔Ｃのないものは全体０。「逃げ去ってしまう」は、「いな

くなってしまう」「門の辺りにいない」などでも可。〕

問５　Ａ翟黄の説明で Ｂ任座が忠臣であることに気づき、Ｃ任座を丁寧に迎えることでＤ文侯の器の大きさを示すことができると考えたから。

Ａ＝２〔「説明」は「言葉」などでも可。〕

Ｂ＝３〔「忠臣」はほかの同意表現も可。〕

Ｃ＝２〔Ｄの手段として書かれていることが必要。〕

Ｄ＝３〔Ｄのないものは全体０。「文侯の器の大きさを示す」は、

「自分自身を賢君とする」「諸大夫の離反を防ぐ」などでも可。〕

【書き下し文】

のし、問１をしてをぜしむ。いはのなるをひ、或いは君のなるを言ひ、或いは君のなるを言ふ。にる。任座はく、君はの君なり。をてて君のをぜずして、以て君のを封じたり。を以てのなるをるなりと。文侯ばず。にる。任座りてづ。ににぶ。翟黄曰はく、君はなり。く、のなるは、其の臣のなりと。任座の言は直なり。是を以て君の賢なるを知るなりと。文侯びて曰はく、すべきかと。翟黄へて曰はく、れぞならん。臣聞く、は其の忠をくして、へて其のをざけずと。座どほにらんと。翟黄きてをれば、任座門に在り。君のを以て之をす。任座るに、文侯をりて之をふ。に座を以てとせり。文侯に翟黄かりせば、ちど忠臣をひしならん。

【現代語訳】

魏の文侯が酒宴を催し、（その場に居合わせた）諸大夫たちに、文侯自身を論評させた。ある者は文侯の持つ仁について評価し、ある者は文侯の持つ義を評価し、ある者は文侯の持つ智を評価した。任座の番になった。任座が言った、王は不肖の君主です。中山を手に入れてご自身の弟を（中山王に）据えずに、ご自身の子を（中山王に）据えなさった。このような理由で王が不肖であることがわかります。文侯は不機嫌になった。（それが）顔色にも表れた。任座は（酒宴の場から）走り出た。次に翟黄が（文侯の前に）出た。翟黄は言った、王は賢君です。私は、王が賢君であるときは、その家臣の言も率直なものになるのだと聞いたことがあります。今、任座の言ったことは率直（な評価）です。このような理由で王が賢君であることがわかります。文侯は喜んで言った、（任座を）呼び戻すのがよいか。翟黄は答えて言った、問３（任座を）どうして呼び戻せないことがありましょうか。いや、呼び戻すことができます。私は、忠実な家臣はその忠節を尽くして、決して死さえも遠ざけはしないと聞いたことがあります。任座はまだ（この場の）入り口にとどまっているでしょう。翟黄が行ってそれを確かめてみると、任座は入り口にいた。文侯の命令ということで（翟黄は）任座を連れて戻った。任座が（酒宴の場に）入ってくると、文侯は（玉座から）階段を下りてこれを迎えた。そのまま任座を上客として遇した。もし文侯に翟黄がいなければ、ほぼ間違いなく忠臣を失っていたことであろう。